

ガンバレ！ 新入社員

首藤 静夫

今年は桜の開花が早かった。新入社員は初仕事（花見の席取り）ができただろうか。僕は昭和四七年にあるメーカーに入社した。配属地は北九州市にある大きな製造所の人事部門だった。初仕事はこの工場に配属された同期入社約二十名の転入届をまとめて市役所に提出するというもの。

職場の先輩が市役所に行くための車を用意してくれた。三十代半ばの親切な女性だ。事務所に社有車が横づけされ、何気なく後部座席に乗り込むとその女性がすっ飛んできた。

「あなたどこに座ってるの、お客じゃないのよ。社有車が空いていたから節約のために使っただけ。助手席に移りなさい」。慌てて移動し車は発進した。どうということはない出来事だけど心に残った。実社会のことが少し分った気がした。

ある日事務室の隅で、先ほどの女性が泣いている。僕の二つ上の先輩（大卒男子）に注意されたとのこと。原因は彼女の字体であった。彼女の字は実に流麗で日々感心させられていた。泣かせた先輩に理由を尋ねたところ、「事務文書は楷書で正確に書かねばいけない。特に人事課の個人記録などはね、それを指摘したんだ」

得意とする字を注意され、字体は簡単には変えられないと彼女は食い下がったようだ。双方に言い分があり、難しいと思った。

職場は課長以下十五名。先輩諸氏の字が揃って綺麗なのに驚いた。ヘタクソな字を気にしていると別の先輩から勇気づけられた。

「大先輩のYさんがこの課の係長のころ、よく遅刻したそうだ。人事課の立場上具合が悪いと始末書騒ぎになり、Yさんは直筆の始末書を課長に提出した。従業員を叱咤激励する飲み会が多いので職務柄遅刻はやむをえないとその中で釈明した。課長から朱字で何か書かれて戻ってきた。Yさんはよく読めない。やむなく課長に尋ねると『内容はこれでいいが字をもっと奇麗に書け』。お二人とも悪筆だった。その二人が出世したんだから余り気にするな」

この会社に入社して良かったと思った。